

## 松中だより 家庭教育支援資料7

過日行われたPTA教育講演会では、児童・生徒の発達・成長に最も大きな影響を及ぼす周囲の大人に余裕がないため、「こどもに関わる」、「こどもに着く」、「こどもに気づく」など、発達段階における教育の適時性を考えるうえで、大切なものが欠落していないかとの指摘がありました。また、こどもたちが、進化的発達を遂げるためには適応力を身に付けることが肝要で、適応力とは、周囲の環境に自分を変えていく能力→忍耐力や、周囲の環境を自分に適したものに変わっていく能力→活動性、創造性、問題解決能力であるとのお話を伺いました。教師も保護者も地域も、こどもたちの将来に待ち受けている社会の荒波を乗り越えていくために必要な力をつけてあげることこそが、我々大人の責任であることを、再認識することができました。松尾中学校PTAではこれからも、「地域でこどもを育む！」ための、大人の学ぶ機会を提供していきたいと思います。

ちょっといいお話！

「思春期の子ども理解」

「泥を肥やしに咲く花」 浄名寺 副住職 松原 紗蓮

私が愛知県西尾市にある浄名寺(じょうみょうじ)に預けられたのは、二歳七ヶ月の時です。幼い頃に両親は亡くなったと聞かされ、親代わりの庵主様や、世間様の「お寺の子はいい子だ」という期待の中で育ちました。同級生からはその逆に、お寺の子であることや、実の親のないことをからかわれ、ひどいいじめを受けてきましたが、「どんな時も前向きでいいよ」という庵主様の教えを守り、泣き出したくなる気持ちを必死に堪えながら幼少期を過ごしました。張り詰めていた神経の糸が切れたのは、中学二年のときです。役所にある書類を提出する際、庵主様から「実はねえ」と言って、出生の秘密を打ち明けられたのでした。聞けば、両親は私が幼い頃に離婚し、母親が再婚する際、娘の私をお寺へ預けたというのです。自分は生まれてきてはいけない存在だったんだ…。一体何を信じて生きていたのだろうか？事実を知った私は、頑張るということに疲れてしまいました。そして三ヶ月泣き通した後、私が選んだ道は、髪の毛を金色に染めて耳にピアスの穴を開け、あらゆるものに歯向かい、強がってみせることでした。暴走族の仲間たちと一晩中走り回り、家出を繰り返す毎日、一四歳で手を出した薬物はその後七年間、一日としてやむことがなく、私など消えてしまえ、という思いから幾度となく自傷行為を繰り返しました。心配をした庵主様は、私が二十歳になった時に「最後の賭け」に出たといいます。私を京都の知恩院へ二十一日間の修行に行かせ、そこで尼僧になる決意をさせようとしたのです。金髪のまま無理やり寺へ押し込められた私は訳がわからず、初めのうちは反発ばかりして叱られ通してでした。ところが十日目を過ぎた頃、教科書に書かれてある仏様の教えが、読めば読むほど、庵主様の生き様そのものと重な

ることに気づいたのです。例えば「忍辱」(にんにく)という禅語があります。私がグシていた七年間、普通の親であれば間違いなく音を上げてしまうような状況で、庵主様はただひたすら堪え忍んでくれたのだ。それは親心を越えた、仏様の心というものでした。また、道場長から「少欲知足」という言葉を教わり、「髪の毛やピアスなど、自分を着飾る物すべてを取り払っても、内から輝けるようになりなさい」と言われました。人間は無駄な物の一切を削ぎ落とした時に、初めて自分にとっての大事なものが見え、本当の生き方ができるようになるのだというのです。私はふと、庵主様の生活を思い浮かべました。庵主様はおしゃれもしなければ、食べる物にお金をかけたいもしない簡素な暮らしで、他の楽しみに時間を使うこともなかった。ではその分一体何に時間を使っていたか、そう考えたとき、庵主様はすべての時間を「私を育てる」という一事に使ったのだと知ったのです。私の思いの至らなかった陰の部分では、どれだけ多くの方が自分を支えてくれたことか、御仏の光に照らされ、初めて親のお陰、世間様のおかげに手を合わせずにはいられなくなりました。そして教科書をよみ進めれば進めるほど、止めどもなく涙が溢れてきました。修行の後、お寺に戻った私が庵主様に、なぜ私を叱ったり、本当の気持ち聞かせてくれなかったのかと尋ねたところ、庵主様は「人間は時間が熟さなければ、分からないことがある。ひと月前のおまえに私がどれだけよい言葉を聞かせても、かえって反発を生むだけだった。いま、おまえがわかるということは、おまえに分かるときがきたということだ。仏道は待ちて熟さん」とお話しになりました。庵主様には一つの願心があり、私がグシ始めた十四歳の時に、十年間は黙ってこの子を見守ろうと決めたのだといいます。そして自らには、何があっても「平素のように生きよ」と誓いを立てたということでした。私はいわば、お釈迦様の手のひらの上で暴れていた孫悟空のようなもので、自らの命を絶とうと人生に背を向けていましたが、どこまでいっても結局は庵主様の手のひらの上にいた。庵主様が私を慈しんでくださる心は無限に広大で、私はその大きな大きな慈悲の中に生かされていたのだと知ったのです。二十三歳で剃髪出家をしたとき、私は庵主様に「紗蓮」(しょうれん)という法名をいただきました。後にある方から「美しい蓮の花は、泥まみれの池の中にしか咲かないのだよ。人生には悩みや苦しみはあって当たり前で、その泥を肥やしにしてこそ大輪の花が咲くのだ」と教わりました。振り返れば十四歳から二十歳までのどん底の時代が、私にとってまたとない、よい肥やしになったと感じています。今年三十一歳になった私ですが、現在はお寺でのお勤めの他、市の教育委員会からの要請で、悩みを抱える子どもたちの自立支援相談や講演活動を行ったりしています。非行に走る子どもたちはそれぞれに、人に言われぬ苦悩を抱えています。けれども、だからこそ大きな可能性を秘めている。人一倍光るようになるよ、この子たちは……。私はそんな気持ちで子どもたちのことを見守っています。

(2009 致知 三月号より抜粋)

## 就学援助制度について

山武市では、お子様を就学させる上で、経済的な理由でお困りの方に対して、学用品や給食費などを援助する制度を設けています。援助を希望される方は、担任または教頭にご相談ください。

制度の詳細については、山武市教育委員会学校教育課(TEL0475-80-1442)にお問い合せください。なお、教育委員会の審査で認定された場合は、認定された月から援助を受けることができます。